

精神科学的教育学派のナチズム体験

— ヘルマン・ノール 1945年 —

坂 越 正 樹

(広 島 大 学)

1. はじめに

ナチス支配体制下(1933-1945)の、H. ノール、E. シュブランガー、T. リットをはじめとする精神科学的教育学派は、ナチズムとの関係において、親近性と隔絶性の間で両義性をともないつつ、それぞれに異なって配置される。また、個人のうちにあってもこの間に、微妙な動揺が認められる。しかし、いずれにしてもナチス独裁前にドイツ教育学において主導的な地位を占めていた彼らが、激変する時代のなかで一種の極限状態を体験したことは事実であろう。彼らはみずからのナチズム体験をどのように位置づけ、内的に克服しようとしたのであろうか。1945年以降、精神科学的教育学派は再びアカデミズム教育学の主流に復し、1960年代まで旧西ドイツ教育学において大きな影響力を保持していた。彼らのナチズム体験を問うことは、一方で、個人としての教育学者が時代状況をいかに受けとめ、それに対峙したのかという精神的内面的相貌を明らかにすることを意図している。また他方で、戦後西ドイツ教育学の根本的立脚点を再吟味し、その自己意識ないし歴史把握を問い直すことを意味している。

本論文では、その起点として、ドイツ敗戦直後のノールの動向に焦点をあて、整理、分析する¹⁾。

2. 1945年のノールとその周辺状況

1937年4月、ノールはゲッティンゲン大学教育学講座教授の職を規定よりも早期に解かれ、1943年3月から1年間は、プロペラ工場へ勤労働員されていた。過酷な労働で身体を壊したあとは、ベルリンから避難してきた義母、妹、娘とともにゲッティンゲン中心部の住居で暮らしていた。ゲッティンゲンは4月8日アメリカ第9軍によって占領され、1週間後モンゴメリ將軍に率いられたイギリス126分遣隊の支配下に入った(5月9日ドイツ全面降伏)。

ゲッティンゲンはあまり爆撃で破壊されず、駅近くでわずか2%の住居が破壊されただけであった。ノールは、弟子のE. ホフマン宛の手紙で次のように記している。

「ここイギリス占領地域でわれわれは本当に平安に暮らしている。人々が狭い場所や避難所で窮屈、悲惨な暮らしをしなければならぬのに。ここには秩序とわれわれを助けてくれるよき意志があり、すべてのことが最良の方向へもどった。イギリス人の道徳性は守られている。」(Cod.645, Nr.279, 9.9.45 *ノール遺稿文書集 Nachlass Herman Nohl のコード番号、及び判明する年月日、以下同)

破壊を免れ、ドイツ中央部に位置するゲッティンゲンは、混乱のなかで情報を求め、連絡をとりあう人々にとって好条件の都市であった。さらにノールを中心とする弟子、友人たちのサークルは、以前から密接な関係を維持しており、ノールの住居はこの時期、ネットワーク・センターとしての機能を果たした。郵便事情の悪いなか Prof. Nohl, Göttingen で手紙が届いたし (Cod.808, Bl.58)、ノールの面会時間は朝から夕方までつづいた (Cod.645, Nr.279, 9.9.45)。晩年のノールの伴侶となった E. ハッキウスやかつての教え子たち O. ヒッペル、W. ラツケはゲッティンゲンへ移ってきた。敗戦時、軍病院にいた E. ヴェーニガー、かつての助手 J. プラーケ、O. F. ボルノウも同様であった。ノールはあらゆるコンタクトの交点となり、多方面からの情報が寄せられた。このように、ゲッティンゲン教育学ゼミナールを中心としたノール・クライスは、きわめて早い時点で再結集したのである。

3. 迅速かつ広範な活動再開

3.1. イギリス占領軍司令部への提言

ナチス支配からの解放後、ノールは即座に活動を再開する。E. ブロッホマンは、このときのノールを「彼の長い生涯ではじめて今、ノールは公的な作用を広範に及ぼす可能性を得た」(Blochmann, S.189)と記している。ナチス体制下で、ノール・クライスの多くの教育者、教育学者が解職され(また復職者も少なくないが)、ノール自身、早期強制退職の対象となったことは、1945年の時点で有利な経歴となった。D. クリカは、この状況を「彼はそれによってイギリス占領軍にとって罪なき共同パートナーとして魅力的な人

物になったのだ」(Klika, S.243)と表現している。

イギリス軍によるゲッティンゲン占領の4日後、ノールはイギリス軍司令官L.ウィルソンに3枚のメモ書きを渡した。そのなかでノールは、次のように生活の再編成と再教育に関する彼の思いを綴っている。第一に、ノールは出来事の真実に関する幅広い啓蒙を求めた。とりわけ青少年(青年将校、労働奉仕やナチス国民福祉事業、ドイツ女子青年同盟の女性指導員、ヒトラー・ユーゲントの指導者たち等々)は、「彼らがそのために戦い働いた偉大な言葉の陰で、彼らが何も知らずわが国民にとって恥ずべきまったく別の行いがなされていた」(Cod.804, Bl.1.) ことについて自覚させられなければならないと指摘する。そのためには、公的な審理が必要であるし、主要な人物に関するその状況を映画で公開すること、また、誠実な案内役とともに強制収容所を見学することを提案する。第二に、ノールは行政組織の改革については、完全な交替ではなく「まともなナチス、その立場を誤用せず人々がその善行のみを知るような人物」は、「無条件にその地位を維持すべき」(Cod.804, Bl.2) であると述べている。第三に、ノールは物資、住宅状況改善のために「大規模な作業プログラム」を要求する。「国民が飢餓や失業、虐待で懷疑に陥ったら、再び過激主義に流れるであろう。今回は共産主義だ。とりわけ倫理的に熱中しやすい青少年は西側よりも東側を選ぶであろう。この危険は今きわめて大きい」(Cod.804, Bl.2)。最後の提言は、青少年に関わることであった。「彼らはとりわけ陣営に引き入れられるべき国民の一部である。というのは、けっきょく彼らが良心や生活の進歩を決定するのであって、古い世代ではないからである」(Cod.804, Bl.3)。青少年は出来事に関して啓蒙されねばならず、「理性的な活動」へ導かれなければならない。とくに、「仕事や秩序を失いうろついている退学青年」にとって、その訓練コースや再教育コースを整備すること、もっともよいのは、先の大戦後の民衆大学運動に似た広範な運動に参加させることであり、ノールは記している。

このメモは、ノールのきわめて迅速な反応と、想定された広範な活動範囲を示すものである。

3.2. ゲッティンゲン市文化顧問

ノールはさらに多様な活動を精力的に展開しはじめる。大学の再開運動にも加わり、ゲッティンゲン大学を1945年9月、すべての学部で教授活動を再開したドイツで最初の大学とすることに貢献する。また、ノールはゲッティンゲン市長の「文化顧問」となり、1945年夏すでにコンサートを開催したり、社会支援団

体「救難(Nothilfe)」を組織し、友人のパラトとともに中心メンバーとして活動していた。

「私自身学校問題に関与し、すべての文化的事項の市長の顧問となった。14日間の音楽の夕べを催した。パラトと私は教育・教授研究所の分館を設置し、さまざまなコースを実施した。とりわけ私の心にあったのは、大学予備コースのプランであったが、それは軍政当局の許可を必要とした。」(Cod.645, Nr.278, 12.7.45)

文化顧問として、ノールはとくに幼稚園の設置問題について市長に提言した。それはナチス体制下の国民福祉事業から青少年局に移管された課題であったが、地域社会には十分な資金が不足していた。ノールは次のように提案する。「住民の自由意志による社会税を導入することが望ましい。私は、このような提案が住民大多数の共鳴を得るものと確信する。ナチス時代に強制的に支払っていた月々50ペニヒを、住民は喜んで市に支払うであろう」(Cod.804, Bl.27) と。この呼びかけは、地域社会に肯定的に受け入れられ、1945年6月、団体「救難」が創設された。その活動領域は、避難民支援、物資の募集と支給、バラック建設にまで広がり、帰還兵士たちに対しても支援がなされた。集められた募金によって、幼稚園と孤児収容施設が開設され、ノール・クライスのO.ヒッペルとW.パッチュケが施設指導者になった(Cod.645, Nr.279, 9.9.45)。

3.3. 教育・教授研究所

ベルリンの教育・教授中央研究所が崩壊し、退去してから後、ゲッティンゲンで再興が試みられた。研究所は早々と1945年5月16日にノールとパラトによって公式に開設された。ノールはその開設挨拶で次のように述べている。「政治や経済によってのみ未来が規定されるのではなく、幼稚園や家庭からはじまり専門学校、大学にいたるまでの【正しい教育】によって規定される、という意識が喚起されねばならない」(Cod.804, Bl.9)。

この研究所がまずめざしたのは、教員たちに対する支援であった。「自発的あるいは義務的に」生じた強制と精神的混乱の12年のあと、自己の「切り替え」と教育活動を実行するよう(ebenda)、支援が必要と考えられたのである。そこでノールが想定していた支援の対象は、ドイツ女子青年同盟、ヒトラー・ユーゲント、国家労働奉仕に従事していた教育者、またかつての将校たちであった。彼らにとって重要なことは、たとえば「純粹な心」からの「高次の価値の力」である(Cod.804, Bl.10)。青少年や戦傷者が多様な教科の再教育を受けるためのコースが編成され、6月から

はヴェーニガーもこの活動に参加した。

教員支援と並んで、重要な課題とされたのは、大学入学のための予備コースの開設であった。この予備コースは、アピトゥアをもたずいわゆる「卒業資格 (Reifevermerke)」を有する者に向けられていた。彼らは学業終了前に兵役に招集されていたからである。希望どおり、ノールは大学全体の予備学修組織のためのコーディネーターの一人となった。これは1945年9月17日から1946年3月17日までつづき (Cod.805, Bl.3)、ノールとパラトによって開設された研究所が担当した。

「9月17日すべての学部でわれわれの大学が動き始めた。私は、予備学修を整備することを請け負った。多くの者が危機的状況にあった。われわれは、3,000人の学生割り当てだけを認められた。それは当然第1日目にすぐ満員となり、また戦場から青年たちがやってきた。」 (Cod.645, Nr.279, 9.9.45)

3.4. 学校制度への関与

1945年6月20日、ノールは市長から将来の学校問題について講演を依頼される。「学校問題への関与は、地方自治体レベルでは、学校の名称、教師の任用、学齢期の始まり等についての決定、広域行政レベルでは、教科書の認可のための軍政当局への提案やヒルデスハイム、ハノーファーの地域行政との調整合意の仕事を含んでいた」 (Cod.804, Bl.22, Bl.17)。人員の問題や政策についての相談は、もっぱらノールの住居で行われ、彼の影響力は大きかった。

1945年8月にはマリーナウで、ニーダーザクセンを中心とするイギリス占領地域での教育問題に関する会議が開かれ、ノールの他にヴェーニガーやフリットナーが参加した。ノールは、A.グリム(後のニーダーザクセン初代文部大臣)とも緊密な関係を保持していた。マリーナウ会議には、ハンブルクやハノーファーからも視学官、教員たちが参加し、普通教育のための初等・中等学校形態、教育学アカデミーや専門大学、また授業科目の目標設定、時間割、教材配置計画等が審議された。教育学アカデミーを継承する教育大学構想は、総合大学での教員養成の立場と対立しながら、結果的に戦後ドイツの主流となっていく。そこでもヴェーニガーをはじめとするノール・クライスマンバーが主要なポストを占めるのである。

4. ノールの影響力の拡大

4.1. 人材提供

ノールと行政当局との緊密な関係は、彼の多くの弟子たちに教職員や指導的ポストを配分するために役だっ

た。軍政当局は、青少年問題に関して、ノールに近い人間集団から適切な若い教育者を見つけようとしたのである。教職員の選考は、「届け出を通じた非個人的方法によるのではなく、このような選考に適任の人物の証明を信頼することでなされる」 (Cod.807, Bl.24) べきものとされた。ノールのもとへ、1945年7月にはヒルデスハイムの地方行政長官から視学官ポストのための照会があったし、ビーレフェルトとパーデルボルンの教育学アカデミーが1946年春開設されたときにも、このような問い合わせを受けた。それは民衆大学の領域からも、女性の職業専門学校からもあった。ノールの推薦は効果的であり、「はっきり需要が供給を上まわった」 (Cod.808b, Bl.73-77) ののである。

もっとも例外はあった。1945年9月1日、ノールはキール大学哲学部から心理学・教育学講座教授ポストに関する照会の手紙を受けとった。キールから求められたのは、プレットナー、デューカー、フォン・ブラーケンについての判断であった (Cod.809: 1, Bl.42/43)。しかし、ノールはこれらの人物に一言もふれず、「キールの心理学・教育学講座ポストについて、私は目下、イギリス占領地域にいる二人の人物のみを考えている。ギーセンで心理学を担当しているボルノウと、キール教員養成大学教授レーメンジークだ」 (Cod.809: 1, Bl.44) と回答した。しかし、その地位を占めたのはプレットナーであった。

さらに一時期、ノールが心外に思う事態が生じた。1946年春、連合軍による非ナチ化の手続きがノールの地位を脅かしかけたのである。

「パチュケ、レーメンジーク、ボルノウが解職、ハイデルベルクで司教、ダルムシュタットでも、ヴァイルブルクでも、まったくばかげた誤った決定によって。……官僚主義がしだいに濃くなり、首のまわりのローブが息ができないほど狭くなっている。彼らは「ザンムルング」のすべての論文執筆者に対して、調査用紙に答えるよう望んでいる。」 (Cod.645, Nr.288, 25.4.46)

学生に対しても「無意味な手続き」が行われ、「有徳な青年」がとがめられ、それによって「抵抗」へ駆り立てられているとノールは批判する。この問題は、調査用紙によって形式的に処理することはできず、それは不当な結果を招くことになるという。ノール・クライスでも、ブラーケ、ヒッペル、ヴェーニガー (1947年、国防軍教育学のため) が非ナチ化審理にかけられた。もっとも、ヴェーニガーはゲッティンゲンのノールの後継者となり、ブラーケはリュネブルク教育大学教授、ヒッペルは孤児院長としての職を守った。

4.2. 雑誌「ザンムルング (Die Sammlung)」の発行

多様な活動とともに、ノールは新しい雑誌「ザンムルング」の編集に取り組む。1945年9月にはすでに、第1号刊行の準備ができていた。雑誌はヴァンデンホエク&ルプレヒトから出版された。ノールはこの出版社と長い間、仕事をしてきたし、発行人ルプレヒトは「教育・教授研究所」の創立メンバーであった。1942年にその出版が差し止められた「教育 (Die Erziehung)」とは異なり、「ザンムルング」の編著者たちはもっぱら「ノール・クライス」に属する人々であった。ノールは、次のような発刊の辞を寄せている。

「われわれの雑誌が、わがフォルクの再生、その文化と教育の再生に捧げられることを願う。過去を振り返ることは避けられえないが、われわれの意志はわれわれの未来の夜明けを前にして、毅然と前を向いている。われわれの羅針盤は、単純な道徳、精神世界の永遠性へのゆるぎない信頼、隣人への愛、荣誉と幸福の太陽が再びわれわれを照らすであろうという生き生きとした希望である。われわれはとりわけ、ドイツ国民の歴史の中でかつてなかった天命を付与された教師たちに向き合い、彼らに新たな仕事のための手だてを用意したい。さらに、善き意志をもち精神の暴力なき力を信頼するすべての人間を集結 (sammeln) させたい。」(ノールによる序言²⁾)

ここには、過去への遡求と同時に、ノールの未来志向、永遠の価値と規範への方向づけが示されている。また市民的道徳への期待も明らかである。この雑誌の課題は、ナチズムによって道徳的に荒廃した民衆を、伝統的なドイツ古典主義の理想像に基づいて再文明化することにあった。

「ザンムルング」は1945年10月すでに10,000部の発行となり、教育学の領域をこえて文化一般に関する論叢として注目された。1945年11月には第2号、12月に第3号と次々と月刊で発行された。ノールは、確かなグループが雑誌の刊行を支えることを当然の要求とした。「雑誌はそれによって固有のスタイルを保持した。そこに、たとえば『構築』あるいは『変化』が見られるとき、それは教育学の最高の部分であり、私を喜ばせた。われわれはポジティブであり、アクティブなのだ。」(Cod.645, Nr.283, 28.12.45)

4.3. ゲッティンゲン大学哲学部長

1946年2月、ノールは、退職前の教育学教授ポストを回復しないまま哲学部長に選ばれる。ポストの再設置は大学の「教授定員増」となり、経済の崩壊状況を理由として軍政当局が許可しなかったからである。学部長として彼は、予備コースと「学生定数をめぐる戦

い」に従事した。ノールは次のように多忙さを嘆いている。「4月7日から14日まで、ツェレとリュネブルグで大学週間が催された。15日さらに私はハノーファーで講演をした。……こうして人は、目的もなく unnecessary な仕事を楽しんでいる。人は私をさらにまた来年の学部長として選出した。私の毎日がつまらなくなる」(Cod.645, Nr.287, 2.4.46)。しかし、この嘆きが必ずしも言葉どおりに受けとられないことは、ノールがホフマンに大学週間を報告した手紙から読みとれる。「今週、私は8日間に9回の講演をした。私がそれを成し遂げ、これまで私が大声で話さねばならないときにいつも破れていた声がまったく保たれたことは誇らしい。だから、これまでうまくいかなかったのは不十分な栄養のせいだったのだ。十分な栄養のとれる今ではそんなことはない」(Cod.645, Nr.288, 25.4.46)。

この時期、ノールはヒルデスハイムで、教員たちを対象とした講演を行っている。この講演には、ノールの教育学的立場が比較的明瞭に示されている。まず、ノールは「過去の汚れと血をほじくすること」は何ら生産的でないとして述べる。その上で、次のことが求められるのである。

「われわれは、われわれの身に生じた犯罪をわれわれ自身のなかで処理しなければならない。この純化は内的転換を必要とする。……そうすれば、ナチズムが長い歴史的発展の最後の恐ろしい帰結であることが明らかになる。そして、その発展はわれわれすべてが多かれ少なかれ、この道がどこに通ずるのか予感することなく、ともに作り出してきたものなのである。」(Cod.859)³⁾。

ナチズムはノールにとって、「悪魔的ぎまん」「誤った理想像」の典型であった。その原因を彼は、過度の民族主義、全体主義国家論、英雄崇拜の誤った概念、盲目的服従の教化に見る。歴史的現実となったこの複合体を克服するために、ノールが提案するのは「ザンムルング」刊行の辞と同じく、「基本的徳」「善」「正直」「配慮」「目的性」である。

「帝国主義の毒牙を抜いた高次の民族主義は、内へと転換され、国民の道徳的精神の高度化について考える。これをわれわれは子どもたちに学校で愛と誠実さをもって配慮するだろう。わが民族の遺伝形質の健全さは保たれ、郷土愛が育まれ、ドイツ語が尊重される。青少年はドイツ運動の純粋な潮流の中におかれ、彼らはレッシング、ゲーテ、シラー、ヘルダーリン、アイヘンドルフへと、われわれの偉大な画家、音楽家へと、ドイツ哲学へと、つまりわが民族の高貴さと誇りを形成するすべてのものへと導かれる。彼らはドイツ精神のこの純粋なエーテルのなかにあって、そこか

ら日常の困難な仕事のための、彼ら自身の小さな存在の精神化のための力を獲得する。」(ebenda)

このような言葉から、ノールも敗戦後の他のドイツ教育学者と同様、伝統的テーマに基づき未来の形成に取り組もうとしたことが理解される。しかし、それは彼にとって理念史的なドイツ古典派の陶冶哲学に基づいてなされるべきことと見なされた。また、ノールはペスタロッチーに教育学の現代的課題に対応した思考形式を見いだしている。つまり、家庭とその教育課題の道徳的革新によって「わが民族を再び構築しようとする」(Nohl 1958, S.25)⁴⁾のである。ペスタロッチーの居間の教育がここで、ナチズムを内的に克服する教育学的戦術となる。教育学的思考の西欧哲学史への方向づけは敗戦後ドイツの全般的傾向でもあった。

5. おわりに

ドイツの敗戦、ナチス支配体制の終焉後、数ヶ月のうちに、ノールは文部省や地方行政の顧問としての地歩をしっかりと占めていた。大学でも再び重要な役割を果たしていたし、ゲッティンゲンやニーダーザクセンをこえて広範に大きな影響力を保持していた。彼をとりまく政治的、社会的、個人的環境は、ノールの理論的、実践的影響力行使のためにきわめて都合がよかったといえる。その意味で、ノールは教育学の「ゼロ時間」にふさわしい人物であった。クリカはこのようなノールの姿を次のように評している。「ノールは、社会における機能の仕方を見抜き、たくみに活用した。彼は、学校、大学、社会教育の事案に対して、単にさまざまな政治的権力領域でうまく立ち回ったのみならず、並行して、さまざまなシステムレベルでめざされた相異なる制度化プロセスを組織した。委員会、団体、研究所、機関誌の創設、それらは相互に彼自身や周囲の人たちによって多重的にネットワーク化されていたのだが、すべてがきわめて短い期間内で、制度として作りだされた。この制度は、固有の関心から設置され、相互に支え合っていた。それらをとおしてノールに直接的、間接的に付与され、彼自身獲得に努めた権力と大きな影響力は、過小評価されるべきではない」(Klika 2001, S.257)。

他方で、歴史的経過として俯瞰すれば、1945年時点でのノールたち精神科学的教育学派は、彼らが熱望したドイツの陶冶理想から遠く隔たった位置にあった。1918年の敗戦時とは異なり、1945年に彼らは教育的熱狂の動因とはならなかったのである。教育学理論としての内実から見ても、ナチス体制下で孤立させられていた彼らの教育学論議、思考形式は、ナチス崩壊後も大きな変化をしていない。彼らは古びた教育学用語を

使用し、国際的な論議からも切断されていた。ノールは66歳、ドゥーデクの言葉を借りれば、有力者たちは学問的盛りを過ぎていたし、弟子たちはそのキャリアを開始したばかりだった。心理学や社会学と異なり、教育学のパラダイム転換、専門科学的再生は期待されえなかった (Dudek, S.102)。

では、1945年のノールの迅速で広範な活動再開、またその社会的影響力と、その教育学理論内実との不整合はどのように理解されるのであろうか。再びドゥーデクの言を引用すれば、その要因はアカデミズムの教育学が1945年以後も「作為的な同質性」を保っていたことに求められる。アカデミズムの教育学において、ナチズムとの対決はこの学問のナチス支配以前の「前科のない伝統」に依拠することで開始される。このような回帰は教育実践においても、占領軍政府によって推進され、当時の教育課題の解決に資することを期待される。また、これがこの教育学の自己理解にもなっていたのである。ノール自身、「今や、われわれが1935年に唱えていたところに、そのまま結び付くことは不可能であろう」と述べつつ、「1900年以来、一世代をとおしてドイツの最良の精神に生気を吹き込んできた教育運動の最後の連関」(Nohl 1949, 3. Aufl., S.229) に連なるべきことを願望している。

【注】

- 1) 本研究のノール及びゲッティンゲンをめぐる周辺状況については、D. Klika (2001)の先行研究に多くを負っている。また、書簡、講演録については、ゲッティンゲン大学ノール遺稿文書集から調査収集したものによって、確認、補充した。
- 2) Rückseite des Einbandes. Die Sammlung, 1. Jg., 1. Heft, Oktober 1945.
- 3) Nohl: Über die sittlichen Aufgaben der Gegenwart. Vortrag, in Hildesheim nach 1945. Cod. Ms.859.
- 4) Nohl: Erziehergestalten. 1958.

主要参考・引用文献

- ①Nachlass Herman Nohl (1879-1960), Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen.
- ②Nohl, Herman: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Frankfurt/M 1949(3. Aufl.).
- ③Nohl, Herman: Erziehergestalten. Göttingen 1958.
- ④Blochmann, Elisabeth: Herman Nohl. 1879-1960.

Göttingen 1969.

③Dudek, Peter: "Der Rückblick auf die Vergangenheit wird sich nicht vermeiden lassen." Opladen 1995.

©Klika, Dorle: "Wir sind die Positiven." "Die Stunde Nohl". In: Jahrbuch für Historische Bildungsforschung, Bd.7., Bad Heilbrunn 2001, SS.239-260.